

ている。しかし、言うまでもなく、『延宝伝燈録』（一七〇六）や『本朝高僧伝』（一七〇七）は江戸時代の書であり、しかも宗外の書である。このような後世の宗外の資料を取って、宗門上古の資料を捨てる根拠は何であろう。氏は「密教導入と密教実践の豊富な長い曹洞宗教団の発展史の上から逆に類推すれば」（本書五三頁）とも述べているから、後の教団の密教をとり入れた歴史の事実を懷持

禅師にまでさかのぼらしめたものとみられるが、このことは逆に言えば、そのような懷持禅師像は後世の教団の要請としての懷持禅師像であって、懷持禅師その人とは異なるのではないか、という疑問が起こるのも禁じ得ない。

田村芳朗・新田雅章著

『智顛』（人物 中国の仏教）

い。本書では、このような起こり得べき疑問に対して、十分な説明は示されていないようである。このような疑問はともあれ、本書は著者の五年有余にわたる苦闘の力作であって、本書の出現は宗門上古史の研究に貴重な一石を投じたものであり、その前進を促したものであることはまちがいない。筆者は、本書を縁として著者がさらに研究を深められることを祈るとともに、宗学界においてもさらに活潑な論議が起こり、研究が前進することを期待したい。

（春秋社、昭和五七年四月発行、A5版、三九〇頁、四五〇〇円）

池田魯參

この度、大蔵出版社で企画された、シリーズ「人物 中国の仏教」は、各時代を代表する仏教者の生きざまや思いのたけに照明をあてることによって、平坦ではない中国仏教の歴史的な展開を具体的に読者に提供しようと

するものであり、各書の刊行が期待されるころである。採択された人物が幅広く中国仏教の歴史の全般にまたがっている点は勿論のことであるが、各書が同ようなスタイルで論述され、それぞれの領域における最新の情報

がコンパクトに採録されている点で、ちょっと他には類のない叢書となるであろう。本書『智顛』は、この叢書の第四回配本にあたる。

本書を開いてみると、最初に、田村芳朗氏が「天台智顛の位置と思想」（七〇―一五頁）を論じ、智顛の活動が中国仏教史のなかで、何のような位置を占めるのか、教理史的な意義について概説している。

続いて、新田雅章氏が「天台智顛の生涯と思想」（一七〇―二六頁）について論述する。共著の体裁をとってはいるが、内容構成からも紙数の配分の上からみても、本書が新田氏の論述を中心に行っていることは、瞭然たる事実であろう。

新田氏が執筆した「天台智顛の生涯と思想」の大綱は、第一章智顛の生涯（一九―六〇頁）。第二章智顛の思想（六一―一八二頁）。付論、智顛の著述とその解説（一八三―二二〇頁）の三章で構成されている。

第二章「智顛の生涯」では、一、出家・慧思との出会い（二〇頁）。二、大蘇山より金陵へ（二四頁）。三、天台山時代（三二頁）―隠棲の動機をめぐって・修行の理想境―。四、「三大部」の講説時代から晩年時代（四

○頁) — 陳の後主の招請・智顓における仏法と王法・晩年の智顓 —。以上の四節にわたって、智顓の伝記が論述される。

第二章「智顓の思想」では、はじめに(六一頁) — 一、止観の体系の基本構造(六一頁) — その基本的枠組み・正修行を導くもの・方便の指示する生活規範・正修行の基本としての止観 —。二、正修止観の方法(七八頁) — 四種三昧・観法の体系 —。三、諸法の「実相」(一二三頁) — 空仮中の三諦・相即的あり方 —。四、教判をめぐる問題(一四八頁) — 教相の三原則・五時と五味・開悟不定・三種教相・いわゆる化法の四教をめぐる —。「まとめ」にかえて(一七五頁)の六節にある。

付論、智顓の著述とその解説(一八三頁)では、一、智顓の著述(一八三頁)。二、著述の解説(一八六頁) — 方等三昧行法・次第禪門・法華三昧懺儀・六妙法門・覺意三昧・法界次第初門・小止観・法華文句・法華玄義・摩訶止観・維摩經疏 —。参考文献(二二二頁)。智顓略年譜(二二〇頁)の四節からなる。

このような内容構成(シリーズ各書に共通する大同小異のスタイル)からみても、本書

が天台学の問題の全般を紹介する概説書として、これからの研究者に種々の便宜を与えるであろうことは確かである。

著者の新田氏は、昨年『天台実相論の研究』と題する、六六〇頁にも及ぶ大著を公刊したばかり(昭和五六年二月、平楽寺書店)である。『智顓』の執筆者として、私はいかにもふさわしいと思う。心から新田氏の執筆の御苦勞をねぎらうものである。

シリーズの一環として、本書も一般読書人をも対象に入れて書かれたのであろうが、今日の学会における天台研究の動向について、獨創性に富んだ新田氏の意見が処々に見られる。『天台実相論の研究』を読んだ(『宗教研究』二五二号、日本宗教学会、昭和五七年六月刊行誌掲載の拙評を参照されたい)直後の私にとっては、本書のなかで初めて新田氏の本音にふれるような思いがした。このような観点からすると、本書は「天台智顓の生涯と思想」について、細大もらさず要点を手ぎわよく整理して紹介する類いの天台研究のガイドブックとしてではなく、『天台実相論の研究』の続編として、新田氏独自の最新の見解を発表した書物としてみる方がいいのかも知れない。

そのような新田氏の、いくつかの新見解のなかから顯著なものを二、三紹介してみたい。第一に、「三大部」の講説時代から晩年時代への論述が、本書では専ら「智顓における仏法と王法」の視点を基調にしてなされている。この方法は、従来の天台研究者がタブーとしてふれたがらなかった点である。この点にメスを入れ、明快に提起した識見と勇氣は大いに評価されてよい。

われわれはもう一步踏み込んで、仏教と俗的権力とを規範的に明確に識別して捉える眼が、彼(智顓)のなかで確立してはいなかった、といいきってよいのではなからうか。(中略)彼においては、仏教と俗的権力との間に介在する緊張関係の存在などは、意識されていなかったように思われる(四七頁)。

と記し、外では、

智顓と仏教の思想内容の了解と承認の上からではなく、自らの衞いのために仏教を保護しようとした晋王広との関係は、智顓の側に立って思想的に整理してみると、彼における仏道修行の純化のための努力が、実は必ずしもその思想の究極性、絶対性を認めようとする王者に支えられて行われた

ことを意味し、その関係はいささか奇妙である（五八頁）。

と論じている。この種の意見は本書の処々にみられ、枚挙にいとまがないほどなのであるが、新田氏の結論は最後まで保留にされている。問題が問題なだけに、新田氏の推論も核心を突くことはできないで、周辺を逡巡する結果に終わったのだといえよう。しかしこの辺に大きな問題が介在しているらしいことは闡明された。諸種の民族が興亡をくりかえした中国史において、「国家仏教」ないし「護国仏教」というような側面から、仏教がそれぞれの社会にはたした歴史的な意義を、智顛個人の問題をも含めて、別途の課題として総合的に検討を加えてみなければならぬであろう。

王法優先のもとでの仏法の保護・奨励は、国家による宗教の支配、宗教の自立性の剝奪という結果をもたらすだけである。智顛においては、右の關係の違いが意識されていたのであろうか。はっきりと捉えられていたようにはどうも思われない（七四頁）。「政教分離」「信教の自由」を建て前とする現代日本人の宗教観を前提に立てて、それによって中国隋代の仏教者の宗教意識を推断する

のはいかがなものであろうか。順序からいっても、むしろその逆の推論式を工夫すべきであったように思われる。

世間と出世間、政權と教權の二元の緊張關係についての前田氏の関心は、「智顛の思想」を論ずる際にも顔を出すのである。例えば、二十五方便を説明する個所では、

仏道修行の場を世俗的世界の外にみる姿勢をつよくもった仏教を、智顛は理想視しているように思われる（五一頁）。

と記している。さらには、
超世俗的な色合いを濃厚に保つ宗教は、自らの意志に反して、世俗批判の態度を弱め、世俗への同化に墮す危険性を、思想的に秘めてもいるといってもよいであろう（七三頁）。

と記して、
世俗に背を向ける結果、その意味なり構造が、かえって捉えられなくなった思想的關係を物語ってはいないであろうか。もちろん智顛における俗権への癒着を導いた思想的要因の第一は、さきにも述べたように、仏法と王法とを規範的に明確に識別して捉えようとする思想の態度にあった、といつてよいであろうが、そうしたことの思想的

背景には、超世俗的態度のなかに秘められたような思想的關係も絡んでいる、とみられてよいであろう（七四頁）。

と結んでいる。このように新田氏のなかで顕在化した課題の所在とその大きさが明らかになる。この方面での氏の今後の研究がまたれるところである。

第二には、「教判をめぐる問題」で、新田氏の率直な見解が示されている。

近時の学会で、関口真大氏によって問題が提起され、関口学説の是非をめぐる形で、十年ほど論争が展開されて来たのであるが、結着はまだついていない。ずっと沈黙を守って成り行きを見とどけようとしていたはずの新田氏が、本書で初めて天台教判に関する見解を公けに表明している。

ここでは彼の教判思想の全体構想を示すということはせず、中心の考えと思えるところを個別的にのべてきたにすぎない。こうしたことにとどまったのは、教判をめぐる智顛の理解が、五時八教説といきってよい構成をもちつつも、いま一つすっきりしない部分を残しているように思えるからである。完結したまとまりをもった「教判」の思想が、智顛において確立していた

のかどうか、もし確立していたとすれば、それはどのような組織・構成をもった教説であるのか、こうした点が明確にされねばならないが、しかし教理のこの領域に関連する智顓の説明がどうもすっきりしないため、そこまで踏み込みえないというのが目下の筆者のいつわらざる気持である。そうしたことに応えるためには、より全体的な視野に立った、きめこまかな論究がさらに必要である(一七二頁)。

と告白している。さらに、註記の形であるが次のような指摘がある。長文であるが引用しておこう。

五時八教説のなかのいわゆる化儀の四教―頓教・漸教・不定教・秘密教―の構想は、智顓以後の彼の学系につながる学僧たちの間で進められた、この三種教相をめぐっての考究を通じて成立したものである、との解釈が提出されている。化儀の四教としてまとめられる教理の原型が、すでに智顓自身の教学思想のうちに形成されており(『法華玄義』一卷上のいわゆる「一卷教相」、彼の学系を継承する学僧たちの間でその面が整理されて、化儀の四教の構想が成立するにいたったというのが、その解釈の見

方の基本である。五時八教説のなかの化儀の四教の構想だけをみるぶんには、それは正鵠を射ていると思う。しかし問題は、化儀の構想でもって、ここでみてきたような教・観二門にひらいて三教・三観を立て、そしてそれがそれぞれ衆生の開悟の方法と過程を示す、とみるこの三種教相の主張を包含しきれぬのかどうか、ということである。筆者には包含しきれぬように思われる。とすれば、化儀の四教へと発展的につながる教学的主張が、智顓の思想のなかにあるのかないのかを問うだけでは、智顓の教判の思想の全体を視野のなかに収めた考究にはならないであろう。ともあれいろいろの意味で、慎重かつ注意深い検討が必要である(一七四頁)。

これらの新田氏の意見は、私(池田)自身も含め、学会で行なわれた教判論争(関口真大編著『天台教学の研究』(昭和五二年大東出版社)のなかに全主張を収録する)をトータルに批評しているわけである。ともあれこれも今後に残された検討課題であろう。

第三に、新田氏独自の教義解釈がみられる点に注意される。例えば、

「観不思議境」これは「不思議境を観ずる」

観法ということである(一〇三頁)。という記述の例がある。

筆者はごく単純に「不思議境を観ずる観法」と呼んでおく方が、この種の観法の内的構造をあらわすのにもっとも見合ったやり方である、と思っている(一〇四頁)。

氏はこのことを記して、「四句推検」や「一心三観」によってする湛然の説明方法が不適確であることを指摘しているのである。因みに『天台実相論の研究』では本書と異なり、「(四句推検)と(一心三観)の節を設け(四三〇頁以下)、湛然の方法にしたがっている。

それはともかく、新田氏の「観不思議境」を「不思議境を観ずる」とことと解する仕方(天台実相論の研究)四三〇頁でも同じ読み方がなされている)は、実は四明知礼の教学においては異端としてしりぞけられた読み方である。知礼は、槌・砧・淳朴の譬喩によって、両重能所の意味構造を明確にし、山外派のように不思議境(真心)を観ずるというような意味ではなく、介爾陰妄の一念の心(妄心)は不可思議であると観ずることというように読むのが「観不思議境」の原初の意味構造でなければならないと主張している。因みに関口真大校注『摩訶止観』巻上(昭和四

一年、岩波文庫本）二七九頁を参照してみても、「心はこれ不可思議の境なりと観ず」と訳されているところである。

このように教理史上とかくの議論がある個所については、なぜ敢えて著者が「不思議境を観ずる」というように読んだのか、簡略なコメントでいいから一言した方が著者自身の解釈の根拠が一層鮮明になったのではなからうか。

これは著者が「あとがき」に記している言葉なのであるが、次のようにある。

人間にとって思想は、現実の意味を読みとり、そしてその人自身が意志決定をくだす際の、いわば「道具」として機能するものであるために、人間がいかなる思想、信条を抱いて生きるのかということ、その人の生き方、行動を左右しないではおかない（二二四頁）。

筆禍であろうか。思想が人間にとって道具であるかないかをここで詮索する必要はないであろう。私自身のことについていえば、仮りに訓詁註釈の方法によってする学問のようなものであったとしても、思想ないし表現された言語体系は、当事者であるその人にとっては世界そのものであるはずだと考えている。

『羅什』『玄奘』（吉津）

まして「智顛の生涯と思想」を論述し終った本書のあとがきの文としてはいささか穏当を欠く発言のように思われるのである。如何。

横超慧日・諏訪義純共著 『羅什』

桑山正進・袴谷憲昭共著 『玄奘』

（人物中国の仏教）

吉津 宜英

一

このたび大蔵出版で「人物 中国の仏教」というシリーズを企画された。日本仏教に関する書物は汗牛充棟もただならぬ状況であるけれども、その源流である中国仏教についての一般向図書に関しては意外と少いので、特に一宗の祖師クラスの高僧や大翻訳を成した三蔵法師など十数人を選び出して、評伝風に読物として提供したいという意図である。それらの高僧たちは、まず羅什、真諦、玄奘、不空の四大翻訳者、そして智顛、吉蔵、道宣、曇鸞―道綽―善導、慧能、法蔵、元暉など各宗の祖師たちである。それらの人々に関

して、それぞれ二人づつで担当し、一人はエッセイ風な自由なスタイルで、他の人は資料に即して実証的に執筆するというのが、このシリーズの新しい趣向である。

さて、今はこのシリーズの中で『羅什』と『玄奘』の二冊について紹介しよう。先ず、『羅什』については横超慧日、諏訪義純の両氏が執筆を担当している。横超慧日博士については今さら筆者がここで特に紹介する必要はないであろう。『中国仏教の研究』三巻を始めた、多くの著書論文によって江湖を碑益されている。諏訪義純氏は現在愛知学院大学助教で、中国仏教史の専攻であるが、特に牧田諦亮博士との共編にて『唐高僧伝索引』三